彙　報

一九八六年一月より
一九八六年一二月まで

研究狀況

班研究

東方部

中國文明の諸源流　班長　林　巳奈夫

當班は、一九八六年三月にて、所定の年限を終えた。研究發表の成果をまとめて、年刊誌『古史春秋』を發行、一九八四、八五年に、創刊號、第二號を出したのにつづいて、一九八六年八月には、第三號を出版した。「諸源流」班の成果發表としては、この第三號が最終號である。

古史新證　班長　林　巳奈夫

地下から發掘された資料が、われわれにどのような新しい事實をうらづけてくれるのか、というテーマで、中國新石器時代から、秦漢ぐらいまでの時代にしぼって、班員に研究發表を擔當していただく。一九八六年四月發足の新班である。期間は、三年間。出版元の好意により、『古史春秋』誌をひきつづき發行できるみこみなので、當班の成果も、隨時同誌上に公表していく豫定である。

石刻資料の研究・整理　班長　梅原　郁

一月二一日　唐昭陵李孟常碑　愛宕　元
一月二八日　奉先寺盧舍那佛龕記　曾布川　寛
二月　四日　漢代豪族の家產關係碑文　勝村　哲也
二月一八日　青龍鎭關係碑文再說　秋山　元秀
二月二五日　識法師頌盧公淸德文　礪波　護

なお本研究班は豫定通り三年間で所期の目的を達して本年度をもって終了した。

中國近世の法制と社會　班長　梅原　郁

唐代に一つのピークに達した中國の法制は、いわゆる「律令制度」の名とともに日本でも多くの研究者が關心を寄せている。また、元代の法制は『元典章』や『通制條格』などを通して本研究所でも優れた研究成果をあげてきた。その中間にあり、しかも中國法制における注目すべきエポックである宋代の法制については、これまで必ずしも十分に究明されているとは言いにくい。本共同研究は、南宋の『慶元條法事類』と、最近その存在が知られるようになった明板『淸明集』の會讀を通じて、律令時代から勅令時代への移行、地方末端で中央の勅令がどのように具體的に運用されていたか等の問題をさまざまな視角から追求する。さしあたり、毎週、『條法事類』と『淸明集』を交互に讀みながら、その現代語譯と詳註をあわせて作成してゆく。

古代中國の科學　班長　山田　慶兒

前年にひきつづき、新出土資料の多い醫學の分野では『黃帝內經』、天文學の分野では『開元占經』などをテキストとしてとりあげて研究を進めた。成果は逐次『東方學報』に發表する豫定である。

標記の期間に行なわれた研究發表は次の通りである。

一九八六年
四月二二日　後漢時代の天文學と政治制度について　新井　晉司
七月　三日　北京自然科學史研究所の活動　張　馭寰
七月　一日　經六主治證の變遷　高島　文一
七月八　日　『黃帝內經』における補寫の論　村上　嘉實
古代釀造における禁忌　小林　淸市
七月一五日　『素問』標本病傳論の時刻制度　林　克
宋元明時代養生書管見―導引書を中心に―　坂出　祥伸
九月三〇日　五行說と醫學の計量化　山田　慶兒
一一月二五日　第三回日韓科學史セミナー報告　坂出　祥伸

江南文人の研究　班長　荒井　健

八四・八五の兩年度にわたり、江南を中心とする地域における舊中國の文人の藝術的・文化的生活について初步的な檢討を行ってきた本班は、八六年三月を以て研究終了。その間、班員の報告十三回のほか、並行して作製中の「長物志」譯注は一・二・三卷および七・十一卷（一部分）まで、「文人關係書目」（假題）は豫定項目の半ばまで、初稿が完成。研究成果の一部として、井波陵一・

大平桂一の清朝文人に關する報告二件を、「東方學報」本册に掲載。

文人の生活　班長　荒井　健

一九八六年度より向う五年の豫定で、舊中國の文人の生活全般について、「江南文人の研究」班の成果をふまえ、精神的・物質的兩面から綜合的な檢討を行ってみようという目的で、本研究班を發足させる。舊江南文人班よりは一層廣範・包括的なテーマをあえて掲げたのは、班員おのおのの關心のありようからして、研究對象をむしろ限定しないほうをよしと考えたのである。研究の進めかたとしては、舊班と同じく、下記のとおり各分野の報告と並行して、十七世紀・明末の代表的な文人趣味文獻たる文震亨「長物志」の會讀を續ける。今期は卷四および七（後半）を讀了した。

五月二日　文人としての青木先生　入矢　義高
一〇月二四日　文人と體操　三浦　國雄
一一月一四日　清朝文人と青銅器　淺原　達郎
一二月一九日　文人と隱逸　茂木　信之

目錄學の諸問題　班長　尾崎雄二郎

今年度より「目錄學の諸問題」班は目錄班（A班）と小學班（B班）とに分けられ、それぞれ隔週にて行われることになった。

先ず目錄班であるが、前年度に引續き黃丕烈『士禮居藏書題跋記』の會讀を進めた。擔當者は、井波陵一・尾崎雄二郎・清水茂・愛甲弘志・宇佐美文理・筧文生・島一の計七名であった。

小學班は前年度迄の「漢語方言史における言語層問題」班を事實上引き繼ぐもので、今年度の研究發表者は次のようであった。

一九八六年
五月一二日　「你」と「那」に就いて　尾崎雄二郎
五月一九日　中國社會科學院語言研究所代表團を圍んでの座談會
五月二六日　雙聲疊韻に就いて　平田　昌司
六月　九日　說文段注裏所見古今字釋例　阿辻　哲次
六月二三日　日本語の音節構造の歷史　木田　章義
九月二九日　近年の『中原音韻』研究　佐々木　猛
一〇月一三日　小學觀の展開　花登　正宏
一一月一〇日　古文・籀文に就いて　中前　千里
一二月　八日　『日本寄語』に就いて　森　博達

轉形期の中國　班長　竹內　實

本研究會は現代中國の多角的な分析とその綜合をめざして、班員による研究報告をつみかさねるほか、隨時、公開研究會を開催し、廣範圍な學術交流をおこなっている。八六年一月より十二月までの狀況はつぎのとおりである。

三月八日　小島朋之著『中國政治と大衆路線』について　竹內　實
　　窰洞について　田中　淡
四月十二日　公開研究會
　　㈠現狀分析
　　政治動向　小島　朋之
　　歷史學界　狹間　直樹

　　㈡中國の最近の世相　辻　康吾
四月二六日　一九八五年の文學動向　萩野　脩二
五月　十日　胡風について　小山　三郎
五月二四日　一九三〇年代初期のハルビン文壇　村田　裕子
六月十四日　最近の長編小說　阿賴耶順宏
　　張潔「重いつぼさ」について　池永　正子
六月二八日　公開研究會
　　㈠中國における川端康成　高　慧勤
　　㈡現狀分析
　　中國の新感覺派　竹內　實
　　中國の教育改革　中島　勝住
九月二七日　公開研究會
　　㈠毛澤東沒して十年　竹內　實
　　㈡中國奧地を旅して　吉田　富夫
　　㈢現狀分析
　　毛澤東記念の論調　北村　稔
　　最近の政治動向　小島　朋之
十月　四日　聞一多『律詩底研究』について　楠原　俊代
　　鄧小平の中國　伊原吉之助
十一月八日　新時期文學の一特色—Onomatopeia にかんして　萩野　脩二
　　陳幹について　北村　稔
十二月十三日　公開研究會
　　㈠魯迅作品の繪畫化　竹內　實
　　㈡現狀分析
　　新時期文學のなかの女性像　辻田　正雄

精神文明の決議について　北村　稔

國民革命の研究　班長　狹間　直樹

本研究班は、この一年間、引き續き五四運動から抗日戰爭に至る時期の諸問題を、各班員が個々にテーマを設定し研究發表を行なってきた。なお、六月六日の何方氏（中國社會科學院日本研究所所長）については、社會科學院院長胡繩氏を團長とする社會科學院代表團來訪の際、公開の研究會として講演を依頼したものであり、一一月二八日の李宗一氏（中國社會科學院近代史研究所副所長）の講演は、神戸の孫文研究會（山口一郎會長）との合同研究會として行なったものである。

一月三一日　中國合作運動の創始と初期活動　菊池　一隆
二月　七日　國故整理と傳統思想　河田　悌一
四月一八日　試論北洋直系軍閥與英美關係　婁　向哲
四月二五日　北洋實業新政下における天津の商工業者　林原　文子
五月　九日　國民革命の精神的前提(一)　狹間　直樹
五月一六日　一九二〇―三〇年代中國農村經濟資料の一整理方法　川井　悟
五月二三日　上海總商會と全國商會聯合會　陳　來幸
六月　六日　中國における日本研究の現狀　何　方
六月一三日　五四運動後の上海勞働運動(一)　江田　憲治
六月二〇日　一九二〇年代の東北文壇　村田　裕子
六月二七日　上海各路商界總聯合會の結成をめぐって　小野　信爾
七月　四日　第一次國共合作の終焉　北村　稔
七月一一日　Mayling Soong : America's Fairytale about China　Laurel Rhodes
九月一九日　孫文と呉錦堂財閥　中村　哲夫
九月二六日　孫文の非常大總統就任　森　時彦
一〇月三日　二一箇條問題と孫文　松本　英紀
一〇月一七日　五省革命協會《章程》の思想とその背景　石田　米子
一〇月二四日　新世紀と天義における女性解放思想　内藤　明子
一〇月三一日　民國期四川の鹽業の販路問題　森　紀子
一一月二一日　國故整理再論　河田　悌一
一一月二八日　民初中國政局與袁世凱　李　宗一
一二月　五日　江蘇省の合作事業　菊池　一隆

禪の文化（第二期）　班長　柳田　聖山

當研究班は一九八六年三月末日をもって、一期二期合わせて七年に及ぶ活動を終了した。その間、「禪林僧寶傳」三十卷の譯注を完了すると共に、廣く禪にかかわる文化史的諸問題を考えて來た。さしあたっては、その成果報告としてテキスト卷五までの譯注を公刊する豫定である。

六朝道教の研究　班長　吉川　忠夫

茅山派道教の大成者と目される陶弘景（四五六―五三六）は、南齊末、玄儒文史にわたる幅廣い教養と藥學に關する精確な知識とをもとに、靈媒に降った道教の神々のお告げを分類整理し『眞誥』七篇としてまとめあげる。本年四月に發足した當研究班は、現存する『眞誥』二十卷の會讀を通して六朝道教の實相を窺おうとするものである。所の内外より約二十名の參加を得、これまでに斯書の解題的部分である卷十九・二十を讀みおえ、現在第一卷の譯註作業を繼續中である。

六朝・隋唐時代の道佛論爭　班長　吉川　忠夫

唐の道宣編『廣弘明集』の會讀を通して、當該時代に於ける佛・道兩教の對立と融合の諸相を究明してきた本研究班は、三月にて終了。その成果の一部として、北周の甄鸞が著した「笑道論」の譯註を發表する豫定である。

中國貴族制社會の研究　班長　礪波　護

八一年四月から始まった當研究班は、本年三月をもって終了した。途中、八四年四月、川勝義雄班長の逝去という不慮の事態にみまわれたが、礪波護班長のもと、故川勝班長の遺志をついで豫定の研究活動をそのまま續行した。終了後、班員一八名の論考をあつめて出版する論文集『中國貴族制社會の研究』は、五年にわたる研究班の成果であるとともに、そこに思い半ばで逝った川勝班長への追悼の意をこめる。

一月二二日　唐代藩鎮と都市　長部　悅弘
二月　五日　ふたつの刑徒墓　冨谷　至
二月一九日　東晉中期の南人寒門層　都築　晶子

中國中世の文物　班長　礪波　護

近年、中國で陸續と發表される出土文物は、文獻史料に限界を感ずる多くの研究者の注目を集めている。同時代資料たる様々な文物の研究は、正史の如き編纂史料を補い、あるいは訂正するだけでなく、未知の研究領域を開拓する糸口ともなり得る。本研究班は、中國の中世（ここでは大まかに秦漢代から唐宋に至る廣い時代を指す）の、傳世品を含む様々な出土文物を紹介してその歴史的意義を検討し、研究の視野を廣げていくことを目的として、一九八六年四月より五年間の豫定で發足した。所の内外から三〇名近い班員の參加を得て、隔週水曜日に文物をテーマとする研究報告が行われている。初年度は十二月までに十名の班員によって、石刻や器物銘など文字資料をはじめ、明器や壁畫、都城址の分析、さらには最新の發掘ニュースのスライド上映に至るまで、バラエティに富んだ報告が行われた。

行歴僧傳にみえる中央アジアとインド　班長　来山　正進

一九八六年二月一〇日、二四日における『慈恩傳』巻五（烏鍛國より長安郊外歸着まで）の會讀をもって、三年にわたる『大唐大慈恩寺三藏法師傳』（巻一より巻五まで）の検討を一應終了した。諸分野にわたる專家の提言をふまえ、現代語譯と語注・内容注とを公刊すべく準備中である。

四―八世紀の中央アジアとインド　班長　来山　正進

一九八六年四月から五年計畫で開始したこの研究の目標は、『高僧傳』・『續高僧傳』の譯經篇にみえる佛僧傳記を検討して表記時代におけるこの地方の史料を得ること、および『往五天竺國傳』・『悟空行紀』を精密に解讀することにある。四月から着手したのは『往五天竺國傳』の精讀で、テキストは『敦煌遺書』第一集の影印本をもとに、羽田・フックス・藤田を參照しつつ、現代語譯とこれをうわまわる注釋とを作りつつある。本研究はイスラーム時代に接近した時期を扱う關係から、イスラーム時代の中央アジア・西アジア史の專家にも協力をあおいでいる。四月から一二月一五日までに一應讀了したのは冒頭から南天竺までの記事である。

日本部

近代日本の政治運動　班長　古屋　哲夫

この研究班は尊王攘夷運動から昭和初期の社會運動まで、近代日本の諸種の政治運動を比較研究することを目的としている。これらの政治運動が生起する條件には、政治體制の集權化、議會の制度化、政黨政治の進展、種々の社會集團の政治化などの政治構造の變化があるが、こうした變動によって生成・展開してくる政治運動を比較・検討する觀點として、運動の組織、綱領の作成、財政基盤、組織指導のあり方等をとりあげ、政治運動に共通する特質をさぐり、同時に近代日本の政治そのものの特徴を追求する。

國民文化の成立：ナショナリズムの諸相　班長　飛鳥井雅道

本研究班もいよいよ最終的な取りまとめの段階に入り、各報告もそれを意識したものになりつつある。對象となっているのは明治二十年前後の、帝國憲法發布と初期議會、そして日清戰爭から條約改正へと至る時期である。これらの狀況をさまざまな側面、すなわち政府與黨と民黨、貴族院と衆議院、中央と地方、國内政策と外交、歐化と國粋といった種々の對立と妥協あるいは融和という有機的な運動としてとらえ直す。各論が報告書においてはさらに有効にからみあって、トータルな時代狀況の把握と解析になることをめざしたい。

一九世紀の文明史的研究　班長　横山　俊夫

人類史において一九世紀とは何であったのか？この問いへの答えを、當時の情報傳播技術と諸文明の態様との連關という視點からさぐっている。二年近い討論を經て明らかになってきたのは、一九世紀における多様な過去の復興である。世俗化・合理化・大衆化などを強調しがちであった〝一九世紀的一九世紀像〟とは別のものが見えはじめている。

日本・東方・西洋各部からの所内班員に加え、本年は客員としてケンブリッジ大學のC・ブラカ博士、カリフォルニア大學のF・ノートヘルファ教授、オクスフォード大學のB・パウエル博士を迎えた。なお、隔週の研究發表ごとに、一九世紀の異文化體驗資料の紹介を併せ行なっている。

西洋部

一八世紀ヨーロッパの空間認識　班長　樋口　謹株

一八世紀は、それまでの閉じた世界から脱け出そうとする時代であると同時に、無限の成長に諸ける歴史の時代一九世紀ともまた違った様相をも

つ時代である。本研究は、この時代の經驗した空間認識の大幅な擴大と變化を、自然的・社會的・シンボル的等のさまざまな側面においてあとづけ、それによってこの時代のエピステーメーを浮彫りにすることを目的とするものである。これまでの個別報告は「多様性のシステム」という共通項を示しており、現在それを軸にした研究成果の總合を急いでいる。

諸宗教の比較論的研究　班長　山下　正男

本研究は、キリスト教、イスラム教、佛教、ヒンズー教、道教、神道、各種民間宗教を研究對象とする。研究方法は文獻學的方法とフィールド・ワーク的方法を併用する。

班員は前掲の諸宗教のうちの一つまたは二つの專門家であって、各人は研究會の場で、自己の分野の專門的知識を提供するとともに、他の分野の專門家と共同して比較研究に努める。その場合、各宗教のもつ重層性に留意する。重層性とは、神學レベル、儀禮レベル、民俗學的レベルからなる重層性を意味する。そして比較に際してはこの三つのレベルの混同を避けるように努める。

本研究の最終目標は、諸宗教の比較によって、宗教一般の歸納法的定義を見出すことにある。

國家の比較史的研究　班長　中村賢二郎

本研究では、ヨーロッパ中・近世の國家を主たる對象とし、また日本、中國、西アジアとの比較も考慮しながら、前近代社會における國家の諸相を明らかにしたい。その社團的編成の原理、諸身分と國家との關係、王權のもつ象徴機能、同時代人の國家觀などを檢討することによって、權力統合體としての中・近世國家の性格を浮彫りにしようというものである。從來までの一國史的視點にもとづく國制史、靜態的な絶對主義論などとは異なった方法論を模索しており、また現在、各時代、地域についての個別報告の蓄積が行なわれている。

ボードレール研究　班長　多田道太郎

本研究班は一九八五年、ボードレール『惡の花』註釋研究班を母體とし、それを引繼ぐ形で生まれたものである。『惡の花』全註釋は十年の長きにわたって研究を繼續したものだが、本年三月、漸くにして研究成果を公刊することができた。全二卷、千六百頁に及ぶ大部の註釋は世界でも初めてのことで、國内はもとより、海外からも注目を浴びることとなったのは喜びにたえない。

前年度はしたがって註釋刊行のためにもっぱら本研究班の精力が注がれる結果となったが、今年度は註釋の成果をふまえて、班員各自が自己の研究に着手したところである。豐富な知識の蓄積をもとにボードレールの新たな全體像が浮び上ってくることを期待している。

民族誌記述の方法をめぐって　班長　谷　泰

一九八六年度より開始された本研究班は、かつて行なった人類學方法論の研究以來志向されてきた、より科學的經驗主義的フィールド調査でのデーター蒐集およびデーター處理の方法の深化とともに、當該對象とする文化世界の認識と思考の仕方によりそって、人びとの行動をいかに記述するか、その方法を追求することを目的としている。

もちろんこの追求は、文化に應じて異なるかたちで構成されている現實というテキストを、その固有性に應じて讀み解くという作業から開始され、一般化されるべきものである。そのためまず各參加者のフィールドに應じた、問題の提出がなされるべきであると考え、各班員によるフィールドデーターに應じた、方法上の疑問點やアプローチの方法が、それぞれによって提示された。また機能主義や構造主義的アプローチ等への反省的討議も並行的になした。今後しばらくは、民族誌記述の方法をめぐる最近の諸説を紹介檢討する。

客員部門

明清時代の國家と社會　班長　岩見　宏

研究發表をもって會を進めている。題目は以下の通り。

一九八六年

一月二一日　清代後期の財政について　岩井　茂樹

一月二八日　明末紹興府における救荒について　藤田　佳美

二月　四日　清代の紳士―常熟縣曾氏の場合　山根　幸夫

四月二二日　自然・必然・萬物一體―呂坤『呻吟語摘』を題材に　三浦　秀一

五月　六日　明末江南鄉紳の具體例―南潯鎮の莊氏について　濱島　敦俊

五月一三日　王韜の洋務運動論　村尾　進

五月二〇日　一五六七年海禁解除以後の福建外閒みどり

五月二七日　門銀から地銀へ―華北の一條鞭法について　谷口規矩雄

六月　三日　清代安徽米の流通について　山本　進
六月一〇日　清代中期　所謂三省交界地帶における移住民社會の展開—嘉慶白蓮教反亂研究序說　山田　賢
六月一七日　五人の墓　福本　雅一
六月二四日　復社と幾社の傳統　呉　傑
七月　一日　中國前近代國內市場私見　狹間　直樹
九月三〇日　清初（順治期）政治史試論　北村　敬直
一〇月　七日　清末の保嬰會運動　夫馬　進
一〇月一四日　清代四川の移民經濟　森　紀子
一〇月二一日　『明代遼東檔案彙編』をめぐって　岡野　昌子
一〇月二八日　『清明集』より見た南宋社會　梅原　郁
一一月　四日　『北京風俗圖譜』について　寺田　隆信
一一月一一日　明清江南市鎭と鄕村の都市化について—明清江南市鎭研究の一　樊　樹志
一一月一八日　山西の宗教史蹟　竺沙　雅章
一一月二五日　乾隆の錢貴　黑田　明伸
一二月　二日　漢學の成立　井上　進
一二月　九日　成化元年庶吉士散館について　阪倉　篤秀

個人研究

東方部

一九三〇年代の中國文學　竹内　實
中國音韻史の研究　尾崎雄二郎
殷周文物の考古學的研究　林　巳奈夫
中國の詩學　荒井　健
中國古代の醫學と思想　山田　慶兒
宋代の官僚制度　梅原　郁
六朝隋唐精神史　吉川　忠夫
隋唐社會史研究　礪波　護
五四時期における中國社會主義の研究　狹間　直樹
プレ＝イスラム期中央アジアの考古學　桀山　正進
中國中世土地所有制の研究　勝村　哲也
六朝道教思想研究　麥谷　邦夫
古代中國における說話傳承の研究　小南　一郎
中國美術の造形と意味　曾布川　寛
中國建築の樣式・技法・空間　田中　淡
モンゴル帝國と中國社會　杉山　正明
中國中世近世の繪畫史　宮崎　法子
東北作家の文學　村田　裕子
周代金文の研究　淺原　達郎
インドと中國における論理思想の展開　赤松　明彦
明清學術史の研究　井上　進
一九二〇年代における中國勞働運動　江田　憲治
對音資料による漢語音韻史研究　林　武實
明末清初士大夫思想研究　三浦　秀一
中國古代都市論　佐原　康夫

漢唐間における天文學と文化　新井　晉司

日本部

日本近代文化史の研究　飛鳥井雅道
日本ファシズムの研究　古屋　哲夫
廢藩置縣の研究　佐々木　克
植民地經濟の研究　山本　有造
文化史および文明史としての國民國家の形成　横山　俊夫
日本近世社會における政治權力　藤井　讓治
政治文化の中の社會理論　山室　信一
近代天皇制成立過程の研究　鈴木　祥二
日本帝國主義の經濟構造　杉本　俊宏
日本の近代建築　井上　章一
日本近代文學の研究　平田　由美
近代日本形成期における地域構造　奥村　弘

西洋部

ルソーの政治思想について　樋口　謹一
ボードレールの〝脫出〟について　多田道太郎
ドイツ宗教改革史　中村賢二郎
西洋論理思想史　山下　正男
社會的相互行爲の解讀　谷　泰
近代社會と家族　阪上　孝
フランス散文詩の研究　宇佐美　齊
シュメール行政・經濟文書の研究　前川　和也
インド世界の儀禮の研究　井狩　彌介
群衆現象の社會學　富永　茂樹
ブルーストの草稿研究　天野　史郎
ヨーロッパ一二世紀の論理學と意味論　岩熊　幸男
社會構造の概念に關する社會哲學的考察　淺田　彰

西洋中世政治思想史　甚野　尚志
民族接觸と異文化の相互作用　細川　弘明

東方部研究會

二月一二日　「先秦時代の鐘律と三分損益法」　淺原　達郎
「帝を象徴する圖像」　林　巳奈夫
二月二六日　『『靜室』考」　吉川　忠夫
三月一二日　「曹黃について」　井波　陵一
「龍門石窟における唐代造像の諸問題」　曾布川　寛
四月一六日　「魯迅在北京做官」　竹内　實
東方學報58册書評
一〇月　八日　井波論文評　尾崎雄次郎
一〇月二二日　小南論文評　林　武實
宮嵜論文評　佐原　康夫
一一月　五日　林論文評　礪波　護
淺原論文評　新井　晉司
一一月一九日　狹間論文評　三浦　秀一
曾布川論文評　荒井　健
一二月　三日　小野論文評　吉川　忠夫

事業概況

夏期講座—社會・技術・人間—　於　本館大會議室

一九八六年八月
一日　明治前期の地域社會　—村寄合から町村會へ—　奥村　弘
「政治社會」史という見方について　山室　信一
二日　清末の青銅器收藏家たち　淺原　達郎
王羲之の「官」奴帖　吉川　忠夫
三日　テクノロジーと文化　淺田　彰
ヨーロッパの古さと新しさ　中村賢二郎

開所記念公開講演會

一九八六年一一月一六日　於　本館大會議室
最後のクラシック　井上　章一
中國庭園の原型　田中　淡
ボードレール—ひとつの詩　多田道太郎

停年退官教授講演會

一九八六年三月二〇日　午後三時　於　本館大會議室
風流、風雅、風狂　柳田　聖山

一九八六年度漢籍擔當職員講習會

〔漢籍電算處理〕は、本學大型計算機センターの協力を得て九月八日より同月一二日まで、それぞれ次の通り行なわれた。

八日　漢字のデーターベース（講演）
大型計算機センター教授　星野　聰
東洋學文獻類目の編纂とフォーマット（講義）
東南アジア研究センター助手　柴山　守
都築　澄子
入出力資料作成（實習）
九日　東洋學文獻類目の計算機處理（一）
大型計算機センター技官　村尾　義和
〃　河野　典
東洋學文獻類目の計算機處理（二）　桶谷猪久夫
入出力實習
一〇日　計算機入門（講義）
大型計算機センター助教授　島崎　眞昭
入出力實習
一一日　情報檢索（講義）
大型計算機センター助手　渡邊　豐英
コンピューターネットワーク（講義）
大型計算機センター講師　飯田　記子
計算機の入出力（講義）
大型計算機センター助教授　金澤　正憲
入出力實習
一二日　附屬圖書館見學
大型計算機センター見學
東洋學文獻類目と漢籍目錄の電算化（講義）
勝村　哲也
質疑應答

一九八六年度漢籍擔當職員講習會

文部省と本所附屬東洋學文獻センターとの共催により、〔初級〕は、一一月一七日から同月二二日まで、次の通り行なわれた。

一一月一七日　漢籍（講義）　尾崎雄二郎
四部分類（講義）　滋賀大學講師　井波　陵一
一一月一八日　目錄法(Ⅰ)（講義）　田中　久子
參考書誌解題（講義）　沼澤　博
實習
一一月一九日　目錄法(Ⅱ)（講義）　田中　久子
實習
一一月二〇日　地誌　井上　進

實習
一一月二一日　新學書　江田　憲治
實習
一一月二三日　質疑應答　尾崎　勝村
井波　江田

所員動靜

○柳田聖山教授（東方部）は、停年退官（一九八六年三月三一日付）京都大學名譽教授の稱號を授與（四月一日付）。
○竹内　實教授（東方部）は、當研究所長に就任し、附屬東洋學文獻センター長に併任。
○山室信一東北大學助教授（文學部附屬日本文化研究施設）は、當研究所助教授に配置換（日本部）。
○奥村　弘氏を助手（日本部）、新井晉司、佐原康夫兩氏を助手（東方部）に採用（以上四月一日付）。
○岩見　宏神戸大學文學部教授は、併任教授に（東方部）。
○井上輝夫慶應義塾大學經濟學部助教授は、非常勤講師（日本部）。（以上比較文化研究部門、八五年四月一日～八七年三月三一日）。
○井波陵一助手（東方部）は、滋賀大學教育學部講師に昇任（四月一〇日付）。
○乘山正進助教授（東方部）は、教授に昇任（一一月一日付）。
○山本有造助教授（日本部）は、一月五日成田發、スタンフォード大學フーバー研究所で張公權文書の調査及び資料收集を終え、同月二四日歸國。
○富永茂樹助教授（西洋部）は、三月一日成田發、パリ市内、ヘルシンキ市内、ストックホルム市内で環境教育についての實態調査、フランス國立國會圖書館で資料收集を終え、四月五日歸國。
○宇佐美　齊助教授（西洋部）は、三月一二日伊丹發、パリ第七大學、國立圖書館、ジャク・ドゥーセ文庫等でフランス近代詩研究のための調査及び資料收集し、六月二七日一旦歸國、再度七月同大学で研究を終え、八月二七日歸國。
○林　巳奈夫教授（東方部）は、四月一日伊丹發、カナダの王立オンタリオ美術館、ハーバード大學、フォグ博物館等で中國青銅器時代遺物の研究を終え、五月一一日歸國。
○山田慶兒教授（東方部）は、六月九日伊丹發、中國上海近郊の馬鞍山市において、上海國際問題研究所と總合研究開發機構と合同シンポジュム「アジア・太平洋地域の發展と二一世紀に向う日中關係」に出席し、同一八日歸國。
○淺田　彰助手（西洋部）は、六月一一日伊丹發、オーストリア國營放送リンツ放送局で「コンピュータ文化」シンポジウムにおける講演、パリ第八大學、ヴェネツィア大學で研究資料收集を終え、七月三日歸國。
○岩熊幸男助手（西洋部）は、七月一一日伊丹發、パリ國立圖書館、ドイツ東邦共和國バイエルン州立圖書館等で中世論理學とくに一二世紀ポルフュリオスの「イサゴーゲー」に關する未刊寫本の校閲・研究・資料收集を終え、九月一五日歸國。
○山本有造助教授（日本部）は、八月一〇日伊丹發、チチハル市の齊齊哈尔師範學院で中日關係史第五次學術研討會に出席し、吉林省社會科學院、遼寧大學等で資料收集を終え、八月二六日歸國。
○杉山正明助手（東方部）は、五月二四日伊丹發、内蒙古大學蒙古史研究所、ハイデルベルク大學、フランス國立圖書館、大英圖書館、ペンシルヴァニア大學等でモンゴル帝國史に關する學術交流をし、一九八七年三月一四日歸國豫定。
○甚野尚志助手（西洋部）は、ハーバード・エンチン研究所の客員研究員として、八月二一日伊丹發、同研究所、ケンブリッジ大學圖書館、ハノーファー大學圖書館で、西洋中世史とくに中世社會史に關する研究をし、一九八七年八月二〇日歸國豫定。
○前川和也助教授（西洋部）は、國際研究集會派遣研究員として八月二三日伊丹發、スイス國ベルン市において開催される第九回國際經濟史學會古代中東部會において「ウル第三王朝時代における食料支給、賃金及び經濟トレンド」の報告、大英博物館で古代オリエント經濟史に關する資料を收集し、九月一五日歸國。
○谷　奏教授（西洋部）は、八月三〇日成田發、連合王國のサザンプトン大學で世界考古學會議に出席し、九月七日歸國。
○乘山正進助教授（東方部）は、九月一七日伊丹發、中國社會科學院世界歴史研究所、北京大學考古系において中央アジア考古研究狀況を視察ののち、新疆地方における佛寺遺跡の立地に關する研究調査を終え、一〇月一三日歸國。
○曽布川　寛助教授（東方部）は、九月三〇日伊

丹發、徐州市博物館、九龍山漢墓、益都博物館等で中國美術の調査、資料收集を終え、一〇月二〇日歸國。

○竹内　實教授（東方部）は、一〇月二〇日成田發、中國社會科學院文學研究所の招請で芙蓉賓館で行なわれた「魯迅と中外文化」學術討論會で報告、討論を終え、同月三〇日歸國。

○狹間直樹教授（東方部）は、一一月二日伊丹發、中山大學、孫中山記念堂で孫中山研究國際學術討論會に參加し、同月一五日歸國。

○勝村哲也助教授（東方部）は、一一月一八日伊丹發、臺北市において開催された情報管理技術自動化シンポジウムに出席し、同月二一日歸國。

○淺田　彰助手（西洋部）は、一二月九日伊丹發、フランス國立ジョルジュ・ポンピドウー藝術文化センターに於いて日本文化シンポジウムで講演をし、同月一八日歸國。

・倉田淳之助名譽所員（八四才）は、四月一一日逝去されました。

外國人研究員（比較社會客員部門）

Fred Notehelfer　カリフォルニア大學歷史學部教授

明治初期の知識人たちの研究　受入教官　飛鳥井教授

期　間　一九八六年三月七日～同年一二月三一日

外國人研究員（日本學客員部門）

Carmen Blacker　ケンブリッジ大學上級講師

南方熊楠とイギリス　受入教官　横山助教授

期　間　一九八六年二月一日～同年五月三一日

Brian Powell　オックスフォード大學東洋學部講師

近代京都南座史の研究　受入教官　横山助教授

期　間　八月一一日～一九八七年四月三〇日

○本學招聘外國人學者受入れ要項により、本研究所において共同研究に參加する外國人學者は次のとおりである。

Willem Jan Boot　ライデン大學教授

德川家康の神格化をめぐる諸問題　受入教官　横山助教授

期　間　一月一日～八月三一日

趙　政男　高麗大學校政經大教授

社會主義政治文化　受入教官　樋口教授

期　間　三月一日～一九八二年二月二八日

John Chaffee　ニューヨーク州立大學助教授

宋代政治制度の研究　受入教官　梅原教授

期　間　九月一日～一九八七年八月三一日

Bardwell Leith Smith　カールトン・カレッジ教授

水子供養の實態調査および歷史研究　受入教官　横山助教授

期　間　九月一日～一九八七年六月三〇日

陳　俊　民　陝西師範大學副學長

日本における中國思想史研究の歷史と現狀　受入教官　吉川教授

期　間　一一月一日～一九八七年一月三一日

江　藍　生　中國社會科學院語言研究所助理研究員

言語史と近代漢語文獻　受入教官　尾崎教授

期　間　一二月一七日～一九八七年一二月一七日

外國人共同研究者

Reinhard H. Emmerich　ハンブルク大學研究員

漢代文化の研究　受入教官　麥谷助教授

期　間　五月七日～一九八七年四月三〇日

○本學研修員規程により、本研究所において研修する外國人研修員とその題目は次のとおりである。

Leslie Pincus　シカゴ大學院生

九鬼周造における美的形式および文化の意義に關する思想史的研究　指導教官　飛鳥井教授

期　間　三月一七日～一九八七年三月一六日

Robert H. Sharf　ミシガン大學院生

初期禪宗の思想　指導教官　吉川教授

期　間　四月一日～一九八七年三月三一日

Lothar A. Falkenhausen　ハーバード大學助手

中國周時代（青銅時代末期）の考古學　指導教官　林　敎授

期　間　四月一日～九月三〇日

Mesnil Evelyne　パリ第七大學院生

蜀國宗教繪畫の研究　指導教官　荒井教授

期　間　四月一日～一九八七年三月三一日

Kriegeskorte Magnus　ボン大學院生

近代日中交渉史　指導教官　狹間　教授
期　間　四月九日～一九八七年三月三一日
Terance C. Russell　オーストラリア國立大學院生
中國の道教と詩歌の關係　指導教官　麥谷助教授
期　間　四月一日～八月二〇日
鄭　欽　鴻　ミシシッピ州立大學院
現代中國の政治構造と社會變動　指導教官　竹内教授
期　間　五月九日～九月三〇日
Janine Sawada　コロンビア大學哲學博士候補生
一八世紀における信仰生活と倫理教育　指導教官　横山助教授
期　間　九月一日～一九八七年八月三一日

出版物

紀　要

人文學報　第五九號（紀要第一〇〇號）
一九八六年二月二八日刊
東方學報　第五八號（紀要第一〇一號）
一九八六年三月三一日刊
人文學報　第六〇號（紀要第一〇二號）
一九八六年三月三一日刊
ZINBUN（歐文紀要）第二〇號
一九八六年三月三一日刊

研究報告その他

東洋學文獻類目　一九八三年度　附屬東洋學文獻センター編
一九八六年三月三一日刊
調査報告　第三四號
當研究所藏日本關係歐文圖書總覽
―一九五〇年以前刊行分―　横山俊夫編
一九八六年三月一五日刊
調査報告　第三五號
京都市内およびその近邊の中世城郭　山下正男著
一九八六年三月三一日刊
新發現中國科學史資料の研究　論考篇　山田　慶兒編
一九八五年一二月二八日刊
ボードレール「惡の花」註釋　多田道太郎編
一九八六年三月三一日刊
所報「人文」第三二號
一九八六年三月三一日刊
一八四八國家裝置と民衆　阪上　孝編
一九八五年九月一五日（ミネルヴァ書房）刊
歴史のなかの都市―續　都市の社會史―　中村賢二郎編
一九八六年一〇月二〇日（ミネルヴァ書房）刊
名公書判清明集　梅原　郁譯注
一九八六一二月一五日（同朋舍）刊
日本領事報告の研究　角山　榮編
一九八六年一二月二〇日（同文館出版）刊